

巻頭言 「重大なことを重大にとる」

宇野 元

『荒野の狼』の主人公ハリーは、居酒屋でふしぎな少女と出会います。人生への別離を思い詰め、夜の暗闇を走り回った彼に、少女は賢い助言をします。まず眼鏡をふいて、食事をしなさい。悩みを打ち明けると、じゃあ、ダンスを踊りましょう。踊れないよ、習ったことがないから。すると少女は言います。こんな簡単なことを習ったことがないのに、人生に骨を折ったなどと大げさなことを言うのか？ 考え深い言葉に、ハリーは心が軽くなるのを感じます。けれども、虚空にぶらさがっているという思いから解放されるわけではありませんでした。

小説のおわりの部分では、なんとモーツァルトが現れて、悩める人、ハリーを諭します。重大なことを重大にとることを学び、それ以外のことは笑い飛ばすことを学びなさい！ 人生の危機に直面していたヘッセが、とめどなく滑り落ちてゆきそうな自分を支えようと懸命に手さぐりし、かろうじて見いだした境地がここに表現されているように思われます。それにしがみつくことで、いくらかの間、みずからを支えることができたでしょう。けれども、天啓のようなひらめきも、永続的な拠り所とするには足りなかったと思います。なぜなら、何を笑い飛ばしたとしても、重大なことにぶつかるのを避けるわけにはゆかないからです。ハリーは、できることなら、それも笑い飛ばしてしまいたい。しかし、逃れることはできないでしょう。

イエス・キリストは、重大なことを重大にとる。それによって私たちに確かな拠り所を示し、与えてくださる方です。私たち誰もが信じたいと思っていること、けれども、心の底では信じられないでいることを、イエスは信じません。すなわち、私たち21世紀の人間には経験と知識の蓄積がある、人生を乗り切るのに、いろいろな方法がある、いろいろな打開策があると思いたい。しかしイエスは、失われているものを、失われているものとしてご覧になります。

聖書に次のような記述があります。イエスは「群衆が、飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(マタイ 9:36)。私たちの自己理解によらず、イエスは私たちが疲れ、弱っているのをご覧になる。あるいは、知恵や能力に富むゆえにこそ、自分を養ってくれる存在がいない、進むべき道がわからない、拠り所がないのをご覧になる。多くの情報に囲まれているが、真に頼れるものがなく、じつは途方に暮れているのをご覧になる。飼い主のいない羊のようであるのをご覧になる。主のまなざしに映る自分をみとめるとき、私たちはその言葉にしっかり耳を傾ける者になります。